

Save the

鉄観音

作・演出 原田裕史

一九四五年、

焦げた匂いがそこかしこで漂う、夏。

最初の舞台は町のはずれの小さな古刹、名を花果山寺（かかさんじ）と言う。
舞台上手には本堂の入り口。

中央奥には観音像（戦勝観音）を安置した小さなお堂と由来の立て札。
格子戸にかかった錆び色の南京錠が頑なに観音像を守っている。

音楽が流れ、ゆつくりと、ゆつくりと客電が落ちていく。（暗転にはならない。）

三日月のか細い月明かりが、舞台奥のお堂だけを青白く照らし出す。

ほんの少しの間。

音もなくお堂の扉が開く。

お堂の中には座した女が一人、その名をフーと呼ぼうか？

一瞬の間。

フーは立ち上がり、ゆつくりと舞台下手へ向かう。

閉じられていく扉。

フー ……昔、戦争があった……長く、大きな戦争だった、人が死に、草も木も虫も死んでいった……降り注ぐ爆弾は、花散らしの雨のようにあまたの魂を散らし、街を火の海に変えた、火は風を呼び、風は地獄絵の中を渦巻き、汚れながら空へ上っていき、黒い雲になって天を覆った……黒い雲は……漫画に出てくる悪魔（魔物）の顔に似ていた、耳元まで避けた口で、下界の人々を見下ろし、臭い息を吐きながら、笑っているようだった……。

舞台下手から、辺りを窺うようにして杉本亮二が登場。

杉本が、お堂へと近づき、ポケットから鍵を取り出し、鍵穴に差し込もうとしたその時。

ウゥウゥウゥ。

突然鳴り響く空襲警報の音。

硬直する杉本。

フー ……サイレンが響き始めると、人々は明かりを落し、身を寄せあった……もしも誰かが、（ゆつくりと杉本に目をやり）泥棒〜！と叫んでも、聞きとめるものはいなかったらう。

フーの声にはじかれたように杉本は我に返り、鍵を差し込み、錠を開けようとする。

錆び付いた鍵はなかなか回らない。

杉本 くそっ……。

フー ……誰もが、頭上でほくそえむ悪魔（魔物）の視線から逃れることに必死だったから……。

ややあつて、

杉本 ……開いた！

杉本はおそるおそる扉を開ける。

開きかけた扉の奥に、うつすらとのぞく観自在菩薩像の御姿。

杉本は息をつき、再び辺りを再び見回し、そしてお堂の中へと入っていく。

舞台上手から竺念が現れ、その様子を見つめる。

ゆつくりと閉じられていくお堂の扉。

フー ……町外れの小さなお寺から戦勝観音という名の一体の仏像がひっそりと持ち出されたのは丁度その頃、蒸し暑い三日月の夜、空襲警報の鳴り響いた8月〇日、午前零時の出来事だった……話は七時間前にさかのぼる。

フーは舞台下手に消える。
たそがれ時。

ジージーと短い生を憐む蟬の声。
西日を受けた笹念の顔はほんのりと紅潮している。

笹念 ……そんなことできるはずがないじゃないか……。

笹念の拳がプルプルと震えている。

舞台下手前から花を持った杉本が登場。

杉本 ……あ、住職……住職。

笹念 ? (我に返り、そしていつものように相好を崩し) ああ、亮二さん。

杉本 こんにちは、ご無沙汰しています…… (持ってきた花束を掲げ) 兄貴の墓参りでもしようと思って。

笹念 ああ、それはそれはご苦労なこと……はて? 盆休みには少し早いようだが。

杉本 休み取ったわけではないんです、勤めていた工場が空襲でやられてしまって、住んでた所も半分燃えてしまったものですから。

笹念 そうか、それは難儀なことだったな。

杉本 疎開して戻ってきましたよ、こちらで仕事探そうと思って、こっちの方が少しは安全ですから。

笹念 いやそうとも限らんよ、偵察機が二、三日前から随分と飛ぶようになったし、そろそろ空襲があるんじゃないかって軍人たちも噂している。

杉本 そうですか……あ、そう言えばここに来る途中会いましたよ、兵隊さんたちに。

笹念 ……ああ。

笹念の顔が一瞬曇る。

杉本 相変わらず彼らはよく来るんですか?

笹念 まあ最近は随分と減ったがな、それでも週に何人かはここに来て手を合わせているよ。

杉本 そうですか、最近の戦局は一向に芳しくないから、戦勝観音のご利益頼みですね、彼らも。

笹念 ……。

笹念は何事か思索している。

杉本は一瞬、そんな笹念を不思議そうに見つめ、

杉本 ……あ、じゃあ俺、墓参りしてきますんで……。

杉本はお墓の方へ向かおうとする。(下手奥か?)

笹念 あ、亮二さん。

杉本 はい?

竺念 あんた……。

杉本 何ですか？

竺念 ……いや、あなたにこんなこと言うのも……どうかと思うが。

杉本 あは、どうしたんですか？

竺念 駄目ならいいんだ、駄目なら駄目で聞き流してくれ。

杉本 ……はあ、何でしょう？

竺念 ……仕事を一つ頼まれてくれないか？

杉本 仕事？……いいですよ、私に出来ることなら、丁度探してるところだし……。

竺念 (少しホツとたように) そうか……やってくれるか。

杉本 で、何の仕事ですか？

一瞬の間。

竺念は辺りを見回し、そして、

竺念 ……ここのご本尊を……観音菩薩像を、疎開させて欲しいんだ。

杉本 (驚いたように) 疎開？……お観音様をですか？

竺念 そうだ。

杉本 ……。

不思議そうに竺念を見つめる杉本。

ほんの少しの間。

竺念 ……さっき来た軍人……あいつらは別にお参りするためにここに来たんじゃないんだ。

杉本 と言うと？

竺念 ご本尊をな……ここを観音様を、供出してくれと言ってきおったんだ。

杉本 供出？

竺念 ああ。

杉本 ……。

竺念 武器を作るための物資が不足している、このままでは本土決戦を戦いきれない、ここのご本尊は鉄で出来ているから大日本帝国のために供出してくれと。

杉本 ……。

竺念 戦いに勝つご利益を持った戦勝観音を溶かして作った鉄砲なら、向かうところ敵なし、お国のためにいい働きをするはずだって……さすがにそれは冗談めかしていたがな。

杉本 ……そうですか……自分が勤めていた工場でも、お寺の釣鐘や鍋、釜が戦艦を作るために供出されてきてましたが、そんなことまで言ってくるようになったんですか。

竺念 よりによつてご本尊で鉄砲を作るなんて、鉄砲は殺生をするための道具だぞ、そんなこと……そんなこと許されるものではない。

杉本 そうですね。

竺念 ……疎開の事は前々から考えていたんだ、そうしたほうがいいんじゃないかって。

杉本 ……。

竺念 最近の空襲は大都市だけじゃなくなつて、小さな町にまで及んでいる、ここだつていつ攻撃されてもおかしくない。

杉本 ……そうですね。

竺念 名古屋城の金の鯨は被害を避けるために取り外されたし、法隆寺や国立博物館でも文化財が次々と運び出されている、国宝疎開つて奴だ、勿論ご本尊は国宝ではない、だが国宝ではないからと言って、壊されていいという道理はあるまい。

杉本 そうですね。

竺念 ……ごこの観音様は四百年あまりのあいだ、ずっと戦いに勝たせて欲しいと言う無茶な願いを聞き続けてきた、戦国の世からこの戦争までずっとだ、慈悲が自分の仏に向かつて、敵を殺してくれと願っている、そして、今度はそれだけでは足りないから鉄砲になつてくれとまで言つて来る……冗談ではない、金の鯨が国の宝なら、この観音様は寺の宝なんだ……壊されたくもないし、鉄砲に変わる事など絶対にあつてはならんのだ、なあ亮さん、なんとかご本尊を安全なところに運んではもらえないか。

杉本 ……。

竺念 勿論 十分な礼はするつもりだ……この通りだ。

竺念は深々と頭を下げる。

杉本 (驚き) あ、顔を上げてくださいよ、任職……困つたなあ。

竺念 頼む。

杉本 でも疎開させるつて一体どこに運ぶんですか？当ではあるんですか？

竺念 ……九州に西遊寺と言う寺がある、わしの知り合いがやっている。ここよりもっと小さな寺だ。そこなら、山奥だし、まず爆弾が落ちる心配はない。

杉本 ……九州ですか……結構遠いなあ……。

竺念 このままご本尊をここに置いておけば空襲でやられるか、たとえそれを免れても供出の憂き目にあつてしまう。

杉本 ……。

竺念 ……頼む、人心の荒廃したこんな時代だからこそ、わしはなんとしても仏像だけは守りたいんだ。

ほんの少しの間。

杉本 ……分かりました。

竺念 やってくれるか！

杉本 今日こんなこと言われたのも何かの縁だ、滅多に墓参りに来ない俺に兄貴がやれって言うてるのかも知れませんがね。

竺念 ありがとう。

竺念は杉本の手を握る。

うなづく杉本。

ほんの少しの間。

杉本 あ、じゃあ俺墓参り行ってきましたんで。

竺念 うん。

杉本は下手奥へ。

竺念 ……(ぼつりと) ありがとう。

竺念はお堂の方へ目をやる。

明かりが夜に変わっていく。

再び遠くで聞こえてる空襲警報。

竺念は不安げに辺りを見回している。

やがてお堂の中から杉本の声。

杉本 ……住職。

竺念 どうした？

杉本 結構重いじゃないですか。

竺念 鉄だからな。

杉本 それは知ってましたけど……よいしょ……うん。

竺念 大丈夫か？

杉本 ……何とか……。

ややあつて、お堂の扉が開き、観音像を背負った(リュックに入れるか?) 杉本が出てくる。

顔を見合わせる二人。

いつのまにか警報が止んでいる。

杉本 ……あ、いつの間にか止んでいますね、空襲警報。

竺念 ああ、偵察機だったのかも知れんな。

杉本 そうですね……。

歩き出そうとする杉本。

竺念 気をつけてな。

杉本 はい。

と、杉本は何かを思い出したようにクスリと笑う。

竺念 なんだ？何がおかしい？

杉本 あ、いや、たいした事ではないんですが……本当にこの観音様を疎開させてもいいのかなと思って……。

竺念 何故だ？

杉本 この観音様のご利益は、戦いに勝つてことですよね……（お堂の横の張り紙に目を近づけ）えっと千百八十年に源頼朝が戦に向かう際、この観音様に勝利を祈念した、そのおかげで勝つことができたって……。

竺念 それが？

杉本 ……いや、その……疎開させるってのは逃げるってことじゃないですか、勝利するぞってご利益の仏様が……逃げるのはどうかなって思っ……戦争やってる最中に……。

竺念 ……。

竺念は一瞬思索し、やがて意を決して杉本に近づく。

一瞬の間。

杉本 ？

竺念 ……（声をひそめ）誰にも言ってはならんぞ。

杉本 はあ？

竺念 わしとあんたの約束だからな。

杉本 何のことです？

竺念 ……その戦勝観音の由来なあ……実は、まったくの出鱈目なんじゃ。

杉本 出鱈目？

竺念 ああ、作り話なんだ。

杉本 作り話って……。

竺念 その話はな、この寺の二代目の法遍（ホウベン）というお方がな、信者を増やすためにでっち上げた創作なんじゃ……頼朝公は断じてここには来ていない、正確に言つと来られるわけがないんだ、何故ならこの寺が出来たのは、千五百六十一年、時代的に言つと織田信長の頃なんだ。

杉本 ……なんで又そんな事を？

竺念 詳しい理由は知らんが、戦国時代のこと、そんな由来で箔でもつけて、武士たちのご加護を受けたかったのかも知れん、だからこの観音様がいなくなっても戦争の勝ち負けには全く影響ないんだ。

杉本 ……戦勝は嘘だったのか……祭りの相撲大会で優勝できたのはそのおかげだと思っていたのに……じゃあ、この観音様のご利益って何なんですか？

竺念 うん、家内安全と安産かな？ここによく来る金子さんがそう言っておったから。

杉本 家内安全と安産か……俺にはあんまり役に立たないご利益だな。

竺念は微笑み、そして、

竺念 ……亮一さん。

杉本 はい。

竺念 ……わしは、そのご本尊を疎開させることは正しい選択だと思っている……しかし、不幸なことにその観音像には戦いに勝つと言いわれがっている……あんたが言ったように、絶対に逃げ出してはいけない観音像なのだ……もしもこの疎開がばれたら、大変なことになってしまう……。

頷く杉本。

竺念 道中、くれぐれも気をつけてな。

杉本 はい。

ほんの少しの間。

杉本 ……それじゃあ行って参ります。

竺念 うん。

去っていく杉本

竺念がゆつくりと合掌をする。

舞台下手からフーが登場。

フー ……体高四尺二寸、重量四貫と五百匁、分かりやすく言うと、百二十六センチ、十六、八キロ、戦勝観音の名を持ち、家内安全と安産にご利益があると言う観自在菩薩像を背中に背負い、その夜、一人の男が疎開先へと旅立っていった……ひっそりと寝静まった町の裏道を抜け、列車の通らない真夜中の線路へ、枕木の下の小石をジャリジャリと踏みしめながら、戦勝観音を背負った男は黙々と西へ向かった……東の空が明るくなると男は列車に乗り、軍人の姿を見つけるとそこで降り、又……歩き始めた、疲れたら眠り、目覚めては又進み、そうやって男は幾つもの山を越え、川を渡り、焼け焦げた町や焼け焦げていない町を通り過ぎていった……。

舞台下手奥に明かりが入る。

据付の階段の上、杉本が汚れたタオルで体の汗を拭っている。

フーは杉本のほうに視線を送り、

フー ……真夏の日差しがジリジリと辺りを焦がしていた、男は恨めしそうに太陽を見つめ……。

杉本 暑いな。

フー ……と、誰に言うともなくそう呟いた。

一瞬間の間。

フー 暑い暑い言うな！暑いのはこっちも同じなんだ！

慌てて声の出所を探るように辺りを見回す杉本。

フリー 男の背中で観音様はそう思っていた……。

フリーは下手に退場。

いつの間にか、舞台は丘の中腹に変わっている。

ジージーと蝉が鳴いている。照りつける真夏の日差し。

ほんの少しの間。

杉本 ……本当に暑いな、なんだか太陽が膨張しているみたいだ……。

杉本はリュックを下ろし、水筒の水を飲む。

子どもの声が聞こえる。

テル アサちゃん！こつちだよ！早く、早く！

アサ 待つてよく、テルちゃん！

一瞬の間。

舞台下手奥から武器代わりの棒切れを持ったテルとアサが誰かを探しながら登場。

テル ……どこだ……。

アサ ……どこだ……。

二人は暫し辺りを見回し、

テル ……よし、アサちゃんこつち行ってみよう。

上手前へ向かいかけるテル。

アサが呼び止める。

アサ ねえテルちゃん。

テル なんだい、アサちゃん。

アサ こつちは（下手前）？

テル そつちは違うよアサちゃん、だってそつちは坂道がきついんだ、それに、そつちの道にはママシの巣があるんだ。

アサ マムシの巣？

テル うん、道のあつちこつちにこんな大きなママシが居て、それがどぐる巻いてじつとしてるんだ、それはまるで、うんちたちが日向ぼっこをしているようなんだ。

アサ うんちたちが日向ぼっこ！

テル そうなんだ、僕は最初、うわー、一杯うんちがあるなああって思ったんだ、もしも僕がハエならここは楽園だ、そう思って近づいてみたんだ、そしたらビュッて、いきなり飛び掛ってきたんだよ。

アサ うんちが！

テル 違うよ、ママシがだよ……僕は危うく噛みつかれそうになったよ。

アサ うんちに！

テル 違っつたら……とにかくそっちの山道は危険で険しいんだ、おなかを減らしてフラフラのスイカ泥棒が行くような道じゃないよ。
アサ そうなんだ。

テル うん、スイカ泥棒が行くとしたらこっちのゆるやかな何も無い道に決まってるよ。

アサ ……そうか、うん、そうかもしれないね、あたしもなんだかスイカ泥棒がそっちへ行っただよな気がしてきた。

テル だろ。

アサ うん！

テル よし、じゃあもうちよつと奥まで探してみよう。

アサ 分かった！

テル アサちゃん！

アサ ？

テル 絶対に、ぜくたつたいにスイカ泥棒を捕まえような、正義のために。

アサ うん、正義のために絶対にスイカ泥棒を捕まえるよ、テルちゃん。

テル よし、行こう。

アサ うん、行こう！

二人はズンズンと上手前に退場。

杉本は苦笑しつつ、去っていく二人を見つめ、

杉本 ……よし、行くか。

杉本はリュックを抱え、下手に歩き出そうとする。

一瞬の間。

背後から男の声。

十勝 ……動くな！

杉本 ！

上手奥から拳銃らしきものを懐に忍ばせた十勝が顔を出す。

十勝 こっち振り返るな……拳銃を持つてるんだ……両手を上げろ。

杉本 ……。

十勝 早く上げろ！

杉本は両手を上げる。

十勝 ……よし……そしたら、その上げた両手を目に持っていけ。

杉本 ？

十勝 早くしろ！

杉本 早くしろって……。

十勝 かくれんぼの鬼みたいに目を隠せばいいんだよ。

杉本はわけが分からないまま両手で目を隠す。

十勝 ……隠したな……いいか、ずるしてこつち見るんじゃねえぞ……見たら撃つからな……。

杉本 ……。

十勝 むん！

十勝は杉本の方にささと進み、体を密着させる。
拳銃らしきものが杉本の腰に当たる。

杉本 ！

十勝 ……ようし、そのままだ、手を下ろすんじゃねえぞ。

杉本 ……。

十勝 ……腹が減って死にそうなんだ、何か食うもの持っていないか、それを渡せば、い、命は取らない……約束する。

と、

遠くからテルとアサの声。

テル ……スイカ泥棒、出て来い！

アサ 出て来い！

一瞬びくりとする十勝。

十勝 (小声で吐き捨てるように) 煩いガキだ。

杉本 ……あんたスイカ泥棒か？

十勝 そうだ、あんまり腹が減ってたんで耐え切れなくなって畑にあつたのを食った、だが泥棒呼ばわりされるほどには食っちゃいねえ、半分、いや精々が大目に見て三分の一程度だ、そこまで食ったところであのガキに見つかった。

杉本 ……。

十勝 このリュックの中にはなにが入ってる？米か野菜か？

杉本 ……食い物なら干し芋が入ってる。

十勝 干し芋……よし……そのまま左手だけ下に下ろしながら、同時に右手で左の目を隠すんだ。

杉本 え？

十勝 左手上げたままだとリュックを取れねえだろうが。

杉本 ……。

十勝 いいか、左目が自由になっても目を明けるんじゃないぞ、左目をつぶったまま右手を移動させるんだ。

杉本 ……こうか……。

十勝 そうだ、そうやりながら左手をゆっくり下ろして、気をつけの指をしろ。

杉本は左手を下ろし、指先を伸ばす。

杉本 ……(面倒くさい強盗だな)。

十勝はリュックに手をかける。

十勝 ……よし、もういいぞ……左手を元の位置に戻して、目隠しをしろ。

杉本 ……。

杉本は再び目隠しに。

十勝 そのまま動くなよ、拳銃もってるんだから……その格好を崩すんじゃないぞ、少しでも崩したらズドンといくからな。

杉本 ……分かったよ……。

十勝はリュックを引きずるようにして杉本から離れていく。

十勝 ……(移動しながら) 芋はどこだ？

杉本 ポケットの中だ。

十勝はポケットから芋を取り出し、ムシヤムシヤと食う。

十勝 ……うん、うん……。

みるみる十勝は芋をたいらげていく。

杉本はその様子をこっそり盗み見る。

十勝 ……(ポケットを探しつつ) もうねえのか？

十勝はリュックのチャックを開く。

一瞬驚く十勝。

十勝 ……何だコレ？何で仏像が入ってるんだ……お前……もしかして泥棒か？

杉本 泥棒はあんただろ。

十勝 俺は泥棒って言われるほどには泥棒じゃねえよ、ただの拾い食いだ。

杉本 (苦笑し) その仏像はちょっと事情があつて運んでるだけだ。

十勝 事情ってなんだよ？

杉本 それはあんたには関係ないだろ。

十勝は怪訝そうに杉本を見つめる。

十勝 どこかで売りさばくつもりか？

杉本 違うよ。

十勝 何か怪しいな、お前。

杉本 怪しいのはそつちじゃないか……もういいだろ、リュック返してくれよ。

杉本は目隠しを解く。

十勝 な、何で目隠し取るんだ！

十勝は慌ててポケットに懐に手を入れ、拳銃を構えようとする。

杉本 拳銃なんて持ってねえじゃねえか。

十勝 ……。

杉本 ……(苦笑し) 食べ物はもう入ってねえよ、後は代えの褲とか歯ブラシとかの生活用品くらいだ、嘘だと思っなら確かめてみるよ。

十勝 ……。

十勝は杉本の様子を伺いつつ、リュックの中をざっと見る。

杉本 ……それで分かっただろ、さ、リュック返してくれよ……さあ。

十勝 分かったよ。

十勝はリュックから手を放す。

杉本はリュックを取り、上手に向かおうとする。

十勝 ……どこ行くんだよ？

杉本 この山の向こうの、富士見町って所だ。

十勝 ……富士見町行って何するんだよ。

杉本 汽車に乗るんだ。

十勝 汽車に乗る？

杉本 ああ。

十勝 はは、そりゃ無理だよ……富士見町は空襲で焼けちゃったんだから。

杉本 焼けた？

十勝 ああ、駅も何もかもな……嘘じゃねえぞ、だって俺は、そこから来たんだ。

杉本 ……。

十勝 命からがら逃げ出してやつの思いでこの村までやってきたんだ、それで一息いたら腹が減ってきて、それで畑のスイカを盗った、いや拾った……(その時を思い出しながら) いやあ大変だったよ……。

杉本 そうか……じゃあその先まで歩いてくしかねえな。

歩き出す杉本。

十勝 お、おい俺の話聞いてなかったのかよ、そっちは駄目なんだよ、こっち行けばいいじゃねえか。

杉本 そっちにはママシの巣があるんだよ。

十勝 マムシの巣？

杉本 そうだ、ママシに噛まれるよりは、焼け野原行く方がまだましだ。

再び歩き出す杉本。

十勝 お、おい、ちょっと待てよ。

杉本 (うんざりしたように) 何だ？何か用なのか？

十勝 いや別に……用ってわけじゃないが……俺、丸二日この辺の山の中さまよってたんだ、久しぶりなんだよ、まともに人と話すの。

杉本 ……。

十勝 あ、タバコ吸うか？……(ポケットからタバコを取り出し) へへ、食うものはねえけどタバコだけは持ってんだよ……(ポケットを探りながら) ええっと火はどこだっけな。

と、

ポケットからこぼれる一枚の写真。

十勝 お！……(写真を拾い上げ) これ、女房と息子だよ、こいつらは女房の実家に疎開させてたんで大丈夫だったけどな、とりあえず俺もそっち行(う)とは思ってたけどよ、なんにも持たずに逃げてきたもんだから、どうにも出来なくてよ……。

杉本 すまないが、あんたの話し聞いている暇ないんだよ、急いでるから。

十勝 ……。

杉本は一瞬上手奥へ目をやり、

杉本 あんたも逃げないと追っ手が迫ってるんじゃないか？

十勝 追っ手？

上手から子どもたちの声。

テル アサちゃん！こっちこっち！そんなに遠くまで行くはずないよ！

アサ 待つてよ！テルちゃん！

十勝 ち、スイカ一個でなんてしつこいんだ。

杉本 (上手に目をやったまま) そこまで戻ってきてるぜ。

十勝 ……ちきしょ。

十勝は一瞬辺りを見渡し、マムシの道へ向かい、

十勝 あー俺がこっちに行ったこと喋るなよな！

杉本はそんな十勝をかすかに笑い、リュックを背負う。
遠くで聞こえる子どもたちの声。

テル スイカ泥棒どこだ〜！

アサ どこだ〜！

杉本 ……さあ、行くか……。

歩き出す杉本。

鳴り響く汽笛の音。

暗転。

ガタンガタンと枕木を揺らす汽車の音が闇の中に響く。

ゆっくりと舞台に明かりが入る。

向かい合った二つの座席。

それぞれの後部座席にも人がいる。

杉本の前には一人の学生らしき男、洋介が座っている。

ほんの少しの間。

杉本はリュックのポケットを探る。

杉本 ……あ、芋はあいつに取られたんだったよな……。

杉本は空腹そうに腹をさする。

洋介がポケットから紙に包んだ焼きおにぎりを差し出す。

洋介 どうぞ。

杉本 え？

洋介 お腹へってるんじゃないですか？僕は食べませんから、どうぞ食べてください。

杉本 ……。

洋介 どうぞ。

杉本 いいのかい？

洋介 ええ。

杉本 ……じゃあ、遠慮なく。

杉本は受け取り食べ始める。
洋介は杉本をじっと眺めている。

杉本 ……(その視線に気付き) うまいよ。

洋介 (微笑み) それ、彼女が作ったんです。

杉本 そうか、料理がうまくてなによりだな。

苦笑する洋介。
ほんの少しの間。

洋介 ……あの。

杉本 うん？

洋介 その席から隣の車両見えますか？

杉本 え？

洋介 隣の車両に青い帽子を被った女の人が居るはずなんです、そこから見えますか？

杉本 青い帽子の女？

洋介 はい。

杉本は怪訝そうに立ち上がり、隣の車両(上手)に目をやる。

杉本 ……？…？…ここからだ隣車両はあまりよく見えねえな…誰なんだい？その青い帽子の女は。

洋介 僕の彼女です、そのおにぎりを作った。

杉本 え？…。

洋介 ……実はこれから二人して彼女の両親に挨拶に行くところなんです…結婚しますって。

杉本 ……そんなめでたい話をしに行くのに、何で彼女と別々の車両に乗るんだよ。

洋介 ……賭けをしてるんです…僕と彼女は。

杉本 賭け？

洋介 はい…別々の車両に乗って、よく考えて、もしも途中でやっぱり結婚するのいやだなんて思ったなら、途中で下車しようって…彼女の家はこの路線の終点の南町ですから、それまでじっくり考えようって。

杉本 ……なんで又そんな事を。

洋介 彼女とは親どうしが決めた結婚なんです、お互いの家にとって有意義だからって…彼女に文句があるわけではないし、父の決めた事に逆らう積もりも勇気もないんですけど…なんだか……だいたいこんなご時世に結婚なんて不謹慎だと思いませんか？

杉本 ……そんなことはないんじゃないか。

洋介 いえ、不謹慎ですよ。

杉本 ……。

洋介 ……僕の友達は何人も戦場に行ってるんです……お国のために戦ってるんです、それなのに僕は、県会議員の父が頼み込んで、肺病つてことになって、徴兵を逃れ、資産家の一人娘と結婚しようとしている……そんなの絶対におかしいですよ。

杉本 ……。

洋介 いずれ僕は彼女の家を後ろ盾にして、父の後をついで、県会議員になるんです、父の作った青写真通りに……大勢の同胞がお国のために生きて、お国のために死んでいるのに、僕は父のために結婚しようとしている……それはどう考えてもおかしいですよ。

杉本 向こうは？彼女は何て言ってるんだよ？

洋介 多分、彼女も僕と似たようなことを考えてるんだと思います、だってこの提案は彼女の方からしてきたんですから。

杉本 彼女の方から？

洋介 はい、もしもあなたがこの非常時に結婚はできないと、そう思うのなら、どうぞ途中で降りてくださいって、私もよく考えてあなたの妻にはなれないと判断したら途中で降りることにしますからって、そうやってどちらかが途中下車しても恨みっこなしにしましようって。

杉本 そうか……。

洋介 ……でもいざとなったらなかなか途中下車なんて出来るもんじゃありませんね、色々な事考えちゃって……だから、僕は……ずるいけど……正直言つて……彼女の方が降りてくれるのを期待してるんです。

杉本 ……そうか……。

ほんの少しの間。

洋介 ……彼女、まだ乗ってますか？

杉本 ……もうちよつと近く寄ってみてくるよ。

杉本は苦悩する若者の肩を叩き、車両の連結部（上手）へ行き、隣の車両を覗く。

洋介 ……どうですか？

杉本 ……青い帽子だったよな……それらしき女は見当たらないけど……。

洋介 本当ですか？

洋介も車両の連結部分へ行き、杉本の背後から隣の車両を覗き込む。

杉本 な、見当たらないだろ。

洋介 ええ、でも、帽子取ったのかもしれないし……あ、あの奥の女性がなんだか似てるような気がするんですよ。

杉本 あの窓際の女の人か？

洋介　そうです……あの、すいませんけど、ちょっと隣の車両まで行って彼女かどうか確かめてきてくれませんか？

杉本　確かめるつたつて、なにをどう確かめるんだよ、俺はお前の彼女の顔知らないんだぞ。

洋介　彼女は目が細くって、ここ(右の目尻)にはほくろがあるんです、だからすぐ分かります。

杉本　……目が細くてここにほくろだな。

洋介　はい。

杉本　じゃあ見てくるよ。

杉本は隣の車両へと行く。
不安げに見守る洋介。
ほんの少しの間。
戻ってくる杉本。

洋介　……どうでした？

杉本　目が細くて、ここにほくろだったよな？

洋介　ええ。

杉本　……居たよ。

洋介　！

杉本　三人も。

洋介　ええ！……何で三人も居るんですか！

杉本　知らねえよ、なんかほかには特徴はねえのか？

洋介　特徴って……あ、そうだ、彼女今、顎の下に吹き出物が出来てるんです。

杉本　顎の下だと覗き込まなければ見えないじゃないか。

洋介　ああ、そうですね……ええつと……あ、そうだ、帽子は、青い帽子を持ってましたか？

杉本　ああ、そうだったな……目の横のほくろだけ探してたから、もう一回見てくるよ。

再び隣の車両へ行く杉本。

反対側の車両から十勝が現れる。

十勝は洋介の様子を伺いながら、杉本が居た座席へ。

十勝　……(隣の車両に目をやり) 悪いな。

十勝は観音像の入ったリュックを取り、去っていく。

ほんの少しの間。

隣の車両から杉本が戻ってくる。

洋介　……ど、どうでした？居ましたか？

一瞬の間。

杉本 (頷きながら) まだ乗ってるよ。

洋介 ……そうですか……。

杉本 彼女、降りる気はないのかもしれないねえぞ。

洋介 え？

杉本 そんな気がしたよ。

洋介 ……。

洋介は恨めしそうに杉本を見つめる。
ガッタン！

突然大きな音と共に汽車が急停車する。

一瞬二人は顔を見合わせ、

杉本 何だ？ 駅着いたのか？

洋介 さあ……。(窓の外に目をやり) どの駅だろう……。

洋介は汽車の窓を開け、身を乗り出す。

洋介 (上手側に目をやり) なんだろう？ 防諜査察なんかですかね、憲兵が乗り込んできますよ。

杉本 憲兵だと！

洋介 ええ。

杉本 大変だ……。(ぼそりと) 観音様が見つかってしまう。

洋介 え？

杉本は慌てて自分の座席に戻る、しかし、

杉本 ……ない……リュックがない！

洋介 え？

杉本 ここに置いといたリュックがなくなってるんだ！

洋介 ……。

杉本は慌てて辺りを探す。

杉本 (後部座席の人に) すいません、ここに置いといたリュック見ませんでしたか？

後部座席の人は首を振る。

洋介も辺りを見渡し、

そして窓の外、リュックを背負って逃げていく男を見つける。

洋介 あ、あそこに！

洋介の声に弾かれ、杉本も窓から身を乗り出す。

洋介 ほら、あれじゃないですか、あのリュック。

杉本 あのやろう。

杉本は窓枠に足をかけ、一気に窓から飛び降りる。

洋介 あ！

杉本 くそ！

杉本は観音泥棒を追って下手へ。

洋介は一瞬考え、そして、

洋介 艶子さん、ごめん！

洋介は汽車から飛び降り、杉本の後を追う。

一瞬の間。

座席の後ろからフーが現れる。

フーは座席にさがり、

フー よつこいしょ。

フーは汽車から飛び降り、舞台前方へ。

明かりはフーのサス明かりに。

フー ……十日あまりで終わるはずだった疎開への静かな旅は、違った方向へ……レールのない旅へと変わっていった。

ガタン！（汽車の動き出す音）

座席に座っていた乗客のコロスが、客席から見えないように座席を運んでいく。

やがて遠ざかっていく汽車の音。

舞台上を行き交う人々の中、リュックの男を探す杉本と洋介。

杉本 すいません！さっきこの辺りをリュックの男が通ったと思うんですけど。

洋介 リュックの男見ませんでしたか？

人々は首を振り、或いは無言で通り過ぎていく。

杉本 リュックの男見ませんでしたか？リュックの上から、荷物がこのくらい出ててそこに白い布がかかっているんです！

洋介 リュックの男。

杉本 すいません、どなたかリュックの男見た人はいませんか！

観音像を探しながら、二人は上手に退場していく。

二人が退場すると同時に下手から背後を気にしつつ十勝が現れる。

フー 男と若者が必死になって探している丁度その頃、観音様は決しておぶわれ心地のよくはないスイカ泥棒の背中で揺れていた。

十勝は舞台中央で額の汗を拭う。

フー 揺れながら観音様は思っていた、こいつの背中ちよつとやだなつて……スイカ泥棒の背中は汗臭かつたし、その湿気がリュックの中まで伝わり、リュックの中が少しベトベトしていたから……観音様は少し息苦しさを覚えていた、だからフック（息を吹き）て……白い布を吹き飛ばした。

観音像を覆っていた白い布がはらりと落ちる。

フー ……とつても涼しかった。

十勝 この仏像を売って家族の元へ行こう、こんな時代だ、仏像にすがりたい奴はいくらでも居るはずだ。

十勝は上手へ退場していく。

フー ……そうこんな時代だ、観音様はすぐに売れる、スイカ泥棒はそう思っていた……しかし、古物商では足元を見られて値を叩かれた、質屋に持ち込むと値をつけられないといわれ、寺に持ち込むと間に合つてると断られた、神社ではうちには神様がいるんだと追い返され、病院ではまだ早いと水をかけられた、スイカ泥棒は足を棒にして町中を歩き回り、なだめたり、すかしたり、おどしたり、愛想を振りまいたりしたが……それでもやっぱり、観音様は売れなかつた……。

上手から疲れ果てた十勝がトボトボと登場。

十勝 ……（ため息をつき）はあ……駄目なあ、さっぱり売れねえ……腹はペコペコだし、足はパンパンだし、肩はヒリヒリするし……。

フー スイカ泥棒はホトホト疲れていた。

十勝 ……よし。

徐に十勝はリュックを下ろす。

十勝 ……す、捨てるんじゃないからなーちよつと置いていくだけだから、嘘じゃないぞ……だから、ば、罰当てるなよー当てたら許さないぞ！

等と言いながら逃げるように上手に去っていく。

フー おいおい、今更罰あてるなもないだろう、道端に捨てられた観音様は苦笑した……翌朝、そこから程近いところに一発の爆弾が落ちた……それはとても大きな爆弾だった、人々は何が起きたのかも分からないまま、何故？の疑問だけを残して影になった、コンクリートにはりつく影になった……それが爆弾なのだ気付いた人々は世界が壊れたのだ思った、黒く焼け焦げた体で世界が壊れたのだと思いながら、空を見上げた……空にはいつの間にか大きなキノコがあり、戦争の悪魔が笑いながらそれを貪っていた……観音様は空の悪魔に向かって何度も問いかけた……どうして、そんなひどい事をするの？……どうして？……

舞台下手から絹代の声。

絹代 ……本当ですつて嘘じゃなくなつて、本当に仏像が捨ててあるんですよ！

フーは舞台下手に。

すぐさま舞台下手から絹代と雁太郎が登場。

絹代 ……ほらこー……ね。

雁太郎 ……確かに……でもこりやあどう見ても捨ててるつて言うより置いてあるつて感じじゃねえか、リュックの中に入れたままなんだし、仏像の持ち主がここに置いたままちよつと用を足しに行っただけなんだだろう。

絹代 だって昨日の夜からあるんですよ、これは、そんなに長い用なら普通は持っていくんじゃないですか。

雁太郎 じゃあ、急にリュックを取りに戻れない事情が出来たか？

絹代 それにしたって一晩置きっぱなしってのは長いんじゃないですか？

雁太郎 確かにちよと長すぎるのなあ……。

絹代 昨夜見たときは置いてあるのかとも思ったんですけど、今朝になってもまだあるし。

雁太郎 ……リュックの中には何が入ってるんだ？

雁太郎はリュックの中を物色し始める。

絹代 ……ちよと大丈夫なんですか？人様の荷物を勝手にあらためたりして。

雁太郎 中を見ないと何にも分からねえだろ。

絹代 ……それはそうですけど。

絹代は不安そうに辺りを見渡す。

雁太郎 ……石鹸と歯ブラシと……なんだこりや禪か……大したものが入ってねえな……。

絹代 何か持ち主の手がかりになりそうなものはないんですか？

雁太郎 うくん……特になさそうだな……あ、ちよと待て、ここに名前が……杉本亮一って書いてるな。

絹代 杉本亮一？

雁太郎 ああ、多分そいつがこのリュックと仏像の持ち主なんだろう。

絹代 何でその人は仏像をリュックに入れてるんでしょうね。

雁太郎 そんな事、俺は知らねえよ、知らねえけどこやうやって運んでるって事は、こいつにとって仏像は大事だつてことなんだろうよ、禪と同じくらいに。

絹代 ……。

雁太郎 で、どうするんだよ？これ？憲兵に知らせるか？

絹代 憲兵はしっかり調べてくれるでしょうか？

雁太郎 うくん、まあ無理だろうな、あいつらにそんな暇はないだろう、その辺にほったらかしておくのが関の山だ。

絹代 私もそう思います。

雁太郎 ……まあ物が仏像だけにほっとけばいいんじゃないか、用事が済めば杉本つてのが戻ってくるだろうし、さわらぬ神じゃなくて仏に祟りなした、ははは。

絹代 ……。

雁太郎 じゃあどうするんだよ？

絹代 ……持ち帰っては駄目でしょうか？

雁太郎 持ち帰る？

絹代 ええ、しばらくの間うちで預かっておいて、その杉本さんって人が戻って来たらお返しすると言っるのは駄目でしょうか？

雁太郎 戻ってくるまでって、戻ってくるのかよ。

絹代 さあ？

雁太郎 さあってお前……。

絹代 でもこのままにしてはおけないじゃないですか。

雁太郎 それはそうだが……。

絹代 なんだかこんな所に寂しそうに仏像が置かれているのを見るとかわいそうじゃないですか。

雁太郎 ……。

絹代 ほら見てくださいよ、この仏様、夜露に濡れて、まるで泣いてるみたいじゃないですか。

雁太郎 ……わかったよ。

嬉しそうに微笑む絹代。

雁太郎はリュックを背負う。

雁太郎 結構重いな、これ……あ。

絹代 どうしたんですか？

雁太郎 なんか書置き残しておかないと俺たちが持つて行ったのが、その杉本ってのに分からないんじゃないか。

絹代 そうですね……。

雁太郎 お前、ちょっと戻ってうちで預かってるって一筆書いて来いよ。

絹代 あ、はい。

雁太郎 住所も忘れずにな。

絹代 分かりました。

絹代は下手に退場。

雁太郎 ……しかし何で仏像なんか運んでるんだ、こいつは……。

ほんの少しの間。

雁太郎 ……ちよつとそのへん捜してみるか……（歩き出し）しかし、重いなあ、この仏像……。

等と言いながら、仏像を背負って、雁太郎は上手奥に退場。

舞台上手前から杉本が登場。

杉本 ……くそ。

杉本は所在無さげに辺りを見渡す。
ほんの少しの間。

洋介 杉本さん

上手前から洋介が登場。

洋介 ……収穫ないですね。

杉本 そうか……。

洋介 ……でも大丈夫ですよ、きっと見つかりますから、僕、向こう（下手奥）捜してきますよ。

洋介は下手に向かおうとする。

杉本 おい。

洋介 はい？

杉本 ……何でお前は一緒になって捜しまわってるんだよ？

洋介 何でって……。

杉本 別にお前まで降りなくてもよかつたんじゃないか？

洋介 ……だって僕があんなこと頼んだ所為で、杉本さんのリュック盗まれたから……。

杉本 別にお前の所為じゃないよ、盗まれたのは俺の不注意だ。

洋介 ……僕と一緒に探したら迷惑ですか。

杉本 迷惑じゃないが……。

洋介 （少し顔をほころばせ）じゃあ捜してきます。

杉本 ……。

洋介は下手に向かい、ふと立ち止まる。

洋介 ……あの、何で杉本さんは仏像運んでるんですか？

杉本は一瞬話そうか、躊躇し、

杉本 ……お前には関係ない話だよ。

洋介 ……ま、そうですけど……じゃあ僕、向こう探してきます。

杉本 洋介。

洋介 ？

杉本 ……間違っても憲兵に尋ねたりしないでくれよ。

洋介 何ですか？

杉本 ……あの観音様は憲兵が嫌いなんだよ。

洋介 ？

洋介は怪訝に思いつつも下手に退場していく。

杉本 ……拳銃なんかにさせるものか……なあ、兄貴。

杉本は大きく息を吐き、上手奥へと向かう。
と、

鳩子 おじさん。

杉本 ？

一瞬の間。

舞台下手前から腕のもげた人形を持ち、顔中を煤だらけにした少女が現れる。

杉本 ……どうしたんだい？

鳩子 あのね、織江ちゃんの腕がもげてしまったの。

杉本 織江ちゃん？

鳩子 この子。

鳩子は人形を掲げる。

杉本 ……そうか、それは可哀想にな。

鳩子 うん、可哀想なの、それでね、織江ちゃんの腕は、運が悪いことに穴の中に入ったの、ほら、私まだ子どもで手も短

杉本 そう？

鳩子 それで私は織江ちゃんの腕を拾ってあげようと穴の中に手を入れたの、だけど運が悪いことに届かなかったの、ほら、私まだ子どもで手も短いでしょ、だからなの。

杉本 ……。

鳩子 私、大人の力が必要な、織江ちゃんの腕を拾ってくれる大人の力が。

杉本 必要なのって……。

鳩子 おじさん、織江ちゃんの腕を拾ってくれない？

杉本 ……。

杉本は一瞬考え、

杉本 ……分かった、いいよ、おじさんが取ってあげるよ。

鳩子 本当？有難う。

杉本 で、ごどだい、その穴は？この近くかい？

鳩子 ……(首を振り)ここからはちよつと遠いの、町のはずれだから、南町駅から少し行った所

杉本 南町駅って……そんなに遠いのかい？

鳩子 うん。

杉本 君はそんなところから来たの？

鳩子 そう、だって誰も織江ちゃんの腕を拾ってくれないんだもん、おじさんだけのの、拾ってあげてもいいよって言うてくれたのは。

杉本 ……まいったな……おじさんはそんな遠くだって思わなかったから……ちよつと、急ぎの用があるんだよ、だから、そんな遠くまで行ってる
余裕は……。

と、遠くを聞こえる子どもの声。

竹三 美哉ちゃん、早く早く。

美哉 待つてよー！竹ちゃん！

鳩子 あーあいつらだ！

杉本 あいつら？

鳩子 いじめっ子たち、私のかばんに虫とか入れたりするの、おじさん、かくまって。

鳩子は杉本の背後に隠れる。

杉本 ……。

舞台下手から竹三と美哉が勢いよく登場し、中央で立ち止まる。

竹三 美哉ちゃん！

美哉 なあに竹ちゃん。

竹三 今日は、学校で習ったことわざをやってみようね。

美哉 うん、何やるの？

竹三 蛙の面にシヨンベンをかけるんだ！

美哉 やったあー……で、どうなるの蛙は？

竹三 もしもことわざが正しければ、蛙は全滅気にしないはずだ。

美哉 うん。

竹三 だけど。

美哉 だけど？

竹三 もしもことわざが嘘なら蛙は……。

美哉 蛙は？

一瞬の間。

竹三は不適な、いやらしい笑みを浮かべる。

竹三 ……うろたえるはずだよ、突然の雨に驚いてね。

美哉もいやらしく微笑み。

美哉 ……はあく、そうだね。

竹三 きつとあたふたするはずさ、蛙は、イヒヒヒ。

美哉 あたふたぶりが見ものだね、イヒヒ。

二人 イヒヒヒヒ。

二人はいやらしく笑いあい、

美哉 イヒヒヒ、竹ちゃん。

竹三 イヒヒヒ、何だい？美哉ちゃん。

美哉 私、なんだか竹ちゃんの顔が悪代官に見えてきたよ。

竹三 ヒヒヒヒ、そういう美哉ちゃんの顔だって、まるで越後屋だよ……お主も悪やろう、越後屋。

美哉 お代官様には叶いませんよ。

竹三 ならば蛙退治に参ろうか？

美哉 ええ、ええ、参りましょう。

二人 ヒヒヒヒ。

二人は下手に向かい、途中で、

竹三 (突然中空に槍を突き上げ) 曲者！

美哉 どうなされました？お代官様。

一瞬の間。

竹三 ……いやただの鼠だったようじゃ。

美哉 近頃は嵐が多いですからね、イヒヒヒ。

竹三 イヒヒヒヒ。

「こんなテレビ的なネタをこの時代の子どもがやるわけがない。」と言う観客のつつ込みを無視して二人は上手に消えていく。
一瞬の間。

杉本の背後で鳩子は震えている。

杉本 ……悪者たちは、もう行ったよ。

鳩子がおそろおそろ顔を出す。

鳩子 ……よかった、どうやらわたし、今日は運がよかったみたい……おじさんありがとう。

杉本 (微笑みかけながら) うん。

鳩子 じゃあ、行こう、織江ちゃんの腕を拾いに。

鳩子は杉本の腕を取り、下手に向かおうとする。

杉本 ……ごめん、おじさんはやっぱりそんな遠くまではいけないな。

鳩子 ……駄目なの？

杉本 誰か他の人に頼んでもらえるかな？

鳩子 他の人は駄目だよ、ここに来るまで誰も織江ちゃんの腕を拾ってくれて言ってくれなかったもん、だからこれからもおじさん以外に拾ってくれる人はいないよ、世界の果てまで行ってもいないよ。

杉本は困ったように辺りを見渡し、

杉本 ……ねえ君、君のお母さんとかは……。

鳩子 鳩子。

杉本 鳩子？

鳩子 私の名前、このとりさんが忙しかったんで、鳩さんが私を運んできたの、おじさんの名前は？

杉本 あ、杉本だけど……。

鳩子 じゃあ、行こう、杉本のおじさん。

鳩子は杉本の腕を掴み、下手に向かって歩き出す。

杉本 あ。

少女の力とは思えないその力に杉本は驚きつつ、

杉本 ねえ、鳩子ちゃん、お母さんかお父さんに頼んだらいいんじゃないか。

鳩子 二人とも死んじゃった。

杉本 ……。

そのまま二人は下手奥に退場していく。
一瞬の間。
舞台上手から雁太郎が登場。

雁太郎 ……さてさて、どこで尋ねたものやら……。

雁太郎が下手前に歩き出そうとしたその時、

矢崎 小石川先輩じゃないですか？

雁太郎 ?

下手奥から憲兵の矢崎が登場。

雁太郎 おお、矢崎じゃないか。

矢崎 ご無沙汰しております、先輩に会うのは八年ぶりでありましょうか。

雁太郎 そのくらいになるかな……（矢崎の腕の憲兵腕章に気付き）ん？なんだお前、憲兵になっていたのか？

矢崎 はい、この地区の地区憲兵隊で曹長(?)をやっております。

雁太郎 そうか……あの、泣きの矢崎がそんなに偉くなったか。

矢崎 ……（ちよつとムツとして）男子三日会うざれば克目して見よとの例え、私はもはや以前の私ではありません。

雁太郎 ははは、まあそんなに目をむくな、久方ぶりの再会じゃないか。

矢崎 ……とここで、先輩は今何をやっておられるでありますか？

雁太郎 俺か？俺は教師をやってるよ、中等科のな。

矢崎 そうですね、先輩の下で学ぶのであれば、みなさぞかし立派な日本男児となる事でしょう、教科は何を？

雁太郎 駄洒落だ。

矢崎 駄洒落？

雁太郎 そうだ、教えてるのは歴史だがな、武田信玄殿に進言いたします！とか上杉謙信の献身的な態度とか駄洒落を交えながらやってるよ、そのほうが生徒も喜ぶからな。

矢崎 そのような冗談が果たして大日本帝国史に必要なのでしょうか？

雁太郎 必要なのでしょうか……言われると……。

矢崎 冗談は精神を弛緩させます、このような廠戒態勢下での、しかも、さして面白くもない駄洒落は、健全なる若人の学力の低下、ひいては国力の低下へと繋がりがね……。

雁太郎 分かった、分かった……（ほそりと）ったく、随分堅物になったな、こいつ。

矢崎 はい？何かおっしゃりましたか？

雁太郎 いや、何も言っていないよ。

矢崎 ところで先輩、背中に背負っているのは、それは？

雁太郎 おお、そうなんだよ……（リュックを矢崎の方にむけつつ）これ、拾い物なんだけどな。

矢崎 拾い物？

雁太郎 ああ、往来に置いてあったんだ、リュックごと、この持ち主になんかあったんじゃないかと思って、ちよつと捜してるところなんだよ。

矢崎 何ゆえに、この持ち主は仏像を持ち歩いているんですか？

雁太郎 そんなこと俺は知らないよ。

矢崎の目が鋭く光る。

矢崎 ちよつと拝見させてもらっても宜しいでしょうか？

雁太郎 おい、下ろすから引つ張るなよ、リュックはりゅっくり下ろせよ、なんてな、ハハハ。

矢崎 笑えませんか。

雁太郎 ……。

矢崎は中を検分する。

ややあつて、

矢崎 ……仏像以外はこれといったものはないようですね。

雁太郎 そうなんだよ、あ、でもそこに名前書いてあるぞ、杉本亮一って。

矢崎 杉本亮一？

矢崎はふと何かを思う。

雁太郎 どうかしたのか？

矢崎 あ、いえ……ちよつと知り合いと同姓同名だったものですから。

雁太郎 ……まあ、ありそうな名前だよな。

矢崎 ……（観音様を少し持ち上げ）この仏像は結構重いですね……青銅かな？……（叩き）ん？待てよ、これは鉄かも知れんな。

雁太郎 なんだよ、鉄だったらどう（銅）なんだよ？あれ、俺、今面白いこと言った？

矢崎 ……。

矢崎は無視して思案する。

矢崎 ……ちよつと調べてみましょう、稲退蔵物資を運んでいるのかも知れない。

雁太郎 稲退蔵物資って……。

矢崎 お国の一大事だと言うのに相変わらず個人の所有物を優先させる輩が多くて本当に困りものですよ。

雁太郎 ……じゃあそれは、その仏像の持ち主がどこかに隠すために運んでいると…

矢崎 ええ、このリュックの中身を見れば、そう考えるのが妥当でしょう。

雁太郎 確かに、普通は、仏像と禪は一緒に運ばないよな。

矢崎 ……もしこれが鉄で出来ているのなら即時徴収ですね。

雁太郎 徴収って…それ仏像だぞ。

矢崎 でも鉄かも知れませんか。

雁太郎 ……。

矢崎 ……よしよ。

矢崎はリュックを持ち上げる。

矢崎 では、失礼致します。

矢崎は上手前に進み始める。

雁太郎 あ、おい、それうちの女房が家に置いておきたいらしいんだけど…。

等と言いながら雁太郎は矢崎の後を追う。

下手前からフーが現れる。

フー ……戦勝観音の後光を暗雲が取り巻き始めた丁度その頃、それとは全く関係なしに……スイカ泥棒は次々と押し寄せてくる悪運におびえていた。

上手奥から棒切れを杖代わりにした十勝が疲労困憊の体で登場。

十勝 ……はあ……はあ。

フー ……実際のところ、スイカ泥棒は本当についていなかった、よく転び、よく人とぶつかった……転んだところには大概馬か犬の糞があり、ぶつかった相手には『どこに目つけてんだ、アンポンタン!』と怒鳴られ、そして殴られた、更に、カラスに襲われ、蜂に刺され、蚊に刺され、後ろ指を差された……それらはすべてスイカ泥棒の星回りの悪さゆえのことだったが、心に疚しさを持つスイカ泥棒は……それを観音様を置き去りにした罰なのだと考えた。

フーが軽く床を鳴らす。

十勝 うあつ!

十勝は音に驚き、身を硬くする。

フー ……もはやスイカ泥棒は木の葉の落ちる音でさえ、迫り来る罰に聞こえるようになっていた……だから彼は戻って来た、置き去りにした観音様を拾うために……しかし……。

十勝 ぬわい!……仏像がない!

慌てて仏像を探し始める十勝。

十勝 ……ちくしょう、一体誰が持ってたんだ？……あれがないと、この罰地獄から抜けられないじゃないか……何処行つたんだよ……おおい、仏像様。

十勝は転びまろびつしながら辺りを必死に探す。

フーはニコニコとその様を見つめる。

と、

下手奥から立て札を持って絹代が登場。

絹代 ……あなた！こんなんでどうでしょうか？

雁太郎が居ないことに気付き、

絹代 ……あれ？何処行っちゃったんだろう、あの人。

絹代は立て札をその場に置き、上手奥に向かう。

絹代 ……リュックも持ってたのかしら？

十勝 リュック？

フー ……あそこ、あの立て札を読めば分かるよ。

一瞬の間。

十勝が慌てて立て札に駆け寄り文句を読む。

十勝 ……（上手奥に向かつて）お、おい、あんた！あ、預かっている仏像って、ここに捨てた、じゃなくて、ちょっと置いておいた……。

絹代が再び登場。

絹代 ……ええ、そうですけど、何か知ってるんですか？

十勝 知ってるものにもあれは……俺が……。

絹代 ああ、あなたは杉本さんですか？リュックに書いてあった名前、杉本亮一さん？

十勝 杉本亮一？

一瞬二人の動きが止まる。

フー ……そうか、杉本亮一はこのリュックの……でも待てよ、ここに俺はそんな名前じゃねえよと言ってしまったら、仏像を取り返す事が出来なくなってしまう、どうせ返してもらえばそれできよならだ、分かりっこねえ……よし。

動き出す二人。

十勝 はい、杉本亮一と申します。

絹代 そうですか、心配してたんですよ、こんな所に丸二日も仏像を置いてあるものですから。

十勝 いやあ申し訳ないです、商談がどうにも長引いてしまって、ハハハ。

絹代 そうなんですか。

十勝 ところで、仏像は？

緦代 ええ……それが主人が持つてるんですけど……その主人がちよっと見当たらないんですよ。

十勝 え？……困るなあ

緦代 遠くには行ってないと思うんですよ、人様のものを持つてるわけですから。

十勝 そりやそうですよ、人の物を持って逃げたら、それは泥棒じゃないですか。

緦代 申し訳ありません……私ちよつと探してみます。

十勝 あ、私も行きますよ、大事な仏像を持ち逃げされるといやですから。

緦代 あのうち、杉本さん、うちの人はそんな事はしませんよ。

十勝 いやいや奥さん、夫婦と言えども盗むときは盗みますよ、現にうちの嫁がそうですから。

緦代 ……(どっという夫婦なのかしら?)

二人は上手に退場。

フーはため息を一つつき、

フー ……結局スイカ泥棒はありがとうの一つも言わなかった……罰当たり続けたほうがよかったかも知れない。

フーは頭を振りながら下手に退場。

洋介の声が下手奥で響く。

洋介 ……リュックの男見ませんでしたか……そうですか、どうもすみません。

洋介が登場し、額の汗を拭い、

洋介 ……(上手奥に人を見つけ) あ、すみません、ちよつとお聞きしたいんですが……。

洋介は上手奥へ消えていく。
下手前から鳩子の声。

鳩子 ほらおじさんもうちよつとだから、この丘の上だから、頑張つて！

鳩子に引っ張られながら杉本が登場。

杉本 ……はあ、はあ……体力あるんだね、鳩子ちゃん……ずっと走りっぱなしじゃないか。

鳩子 息切れちゃったの？

杉本 うん、ちよつとね……はあ、はあ……(鳩子に微笑みかけ) もう走れないよ。

鳩子 もう走らなくてもいいよ、ここだから。

杉本 え、ここなの？

鳩子は舞台上手に走る。

鳩子 ここなの、ここに織江ちゃんの腕が落っこちてるの。

鳩子は上手の瓦礫を指差す。

杉本 ……そうか……はあ、はあ……よし。

杉本は荒い息を吐きつつ、穴のそばへ行き、中を覗く。

鳩子 織江ちゃんの腕、見える？

杉本 うん、あの白いのがそうみたいだな。

鳩子 取れそう？

杉本 多分ね。

杉本は穴の中へと手を伸ばす。

杉本 ……ん……もうちよつとだ……よいしょ……。

鳩子 頑張っつて。

杉本 ……ん？先のほうをつまめたぞ……これを落っこちさないように……そうつと……。

鳩子 そうつとだよ……。

杉本 ……よいしょ。

杉本の腕が少しずつ抜かれていく。

鳩子 もうちよつと。

杉本 ……ほうら取れた！

杉本が拾い上げた人形の腕を掲げる。

鳩子 やったあ！

杉本 ……（腕を手渡しながら）はい。

鳩子 ありがとう、よかったね織江ちゃん、腕が見つかったよ、杉本のおじさんが拾ってくれたの。

鳩子は愛しそうに何度も何度も織江の頭を撫でる。

杉本はそんな鳩子を微笑ましく見つめる。

高原を風が渡る。

杉本 ……随分といい風が吹いてる、涼しいなあ……運動したから気持ちいいよ。

鳩子 （深々と頭を下げ）おじさん、本当にありがとう。

杉本 うん。

鳩子 織江ちゃんも有難うって言うてる。

杉本 どういたしましたして。

鳩子 ふふふ。

二人は微笑みあう。
ほんの少しの間。

杉本 ……でもここは本当に気持ちいいね、見晴らしもいいぞ。

鳩子は一瞬顔を曇らせ、

鳩子 ……私ね、昨日ここから見たの。

杉本 何を？

鳩子 ……キノコの爆弾。

杉本 ああ……。

鳩子 ……(前方を指差し) ちょうどあの辺に落ちたの……あの山の向こうに、ドゥンって凄い音がして、体がビリビリしたの。

杉本 そうか、こんな遠くからも見えたのか……昨日のは。

鳩子 うん……。

ほんの少しの間。

杉本 そうか……鳩子ちゃんはここで見てたんだ。

返事は返ってこない。

杉本 そろそろ帰ろうか？

鳩子の居た方を振り返る杉本。
だが、

杉本 ……鳩子ちゃん……あれ？

杉本は辺りを見渡す。
鳩子の姿は何処にもない。

杉本 ……鳩子ちゃん……何処行つたんだ？……おおい、鳩子ちゃん！

杉本は辺りを探してみる。

杉本 鳩子ちゃん……おおい！

ふと何かを感じたかのように杉本は立ち止まる。
一瞬の間。

鳩子の声が響き渡る。(これはスピーカーからだな)

鳩子の声 ……わたしね、昨日ここから見たの……キノコの爆弾を……。

杉本は舞台前方へ進み、溶けてしまった町へ、原爆の落ちたヒロシマの町へと目を凝らす。明かりは杉本のサス明かりに。

音楽が流れている。

一瞬の間。

やがて、パチ。パチと火のはぜる音。

舞台奥がほんのりと赤く染まり始める。

それはいつしかすべてを焼きつくし、そして溶かしてしまう灼熱の、紅蓮の炎へと変わっていく。

杉本 ……。

舞台後方にコロスたちが現れる。

コロスは、陽炎のように揺らめきながらほんの少し歩を進め、そして倒れる。

次のコロスが最初の死体の上に倒れこむ。

そしてその次のコロスがその上に。

……死骸が山のように積み上げられていく。

上手奥からフーが登場し、死体の山を悲しげに見つめる。

フー ……。

杉本 ……聞こえる……溶けていく人の声が……町の音が聞こえる……。

ややあつて、舞台後方の明かりが落ちていく。
我に返る杉本。

ほんの少しの間。

杉本 ……守らなきゃ……戦勝観音を守らなきゃ……。

杉本は、自分の位置を確認するように一瞬辺りを見回し、下手前方へと退場していく。

フー ……。

フーが去っていく杉本に手を合わせる。

音楽が死者の御霊を天へ導いていく。

明かりが静かに落ちていく。

暗転。

ゆっくりと舞台が西日に染まっていく。

ほんの少しの間。

杉本が原爆の丘から息を切らせて戻ってくる（下手奥）。

荒い息を吐き、疲労困憊になりながらも杉本は辺りを見渡す。

杉本 ……はあ、はあ……観音様探さなきゃ……。

杉本は疲れた足取りで下手前に向かいかけ、そして、その行く先に当てがないことに気付く。

杉本 ……はあ、はあ……どこ探せばいいんだよ……どこを……。

ほんの少しの間。

杉本は萎えかけた自分の心を叱咤するように、大きく首を振る、あるいは顔を叩く。

杉本 ……見つけなきゃ……なんとしても見つけなきゃ……。

杉本はもう一度辺りを見渡し、当てのない行く先に当たりをつけ、上手前方へと歩き始める。
と、
下手奥から洋介。

洋介 杉本さん！

杉本 洋介。

洋介 一体どこに行ってたんですか！随分探したんですよ！

杉本 悪い、ちよつとな……。

洋介 ありましたよ、観音様、見つけましたよ！

杉本 本当か！

洋介 はい。

杉本 どこだ！

洋介 それがちよつとややこしいって言うか、よく分からない話になってて。

杉本 よく分からない話ってなんだよ？

洋介 それが憲兵の手に渡ってて……。

杉本 なんだと……憲兵に……。

洋介 はい。

杉本 なんで憲兵の手に渡ってるんだよ！

洋介 分かりませんよ！でも、リュックは間違いなく杉本さんのだと思うんですよ、観音様も入ってたし……でもそれは俺のリュックだって人が現れて……その人連行されそうになって……ああ、もう説明してても埒明かないや、とにかく僕と来てください、あれは間違いなく杉本さんのリュックですから。

杉本 分かった、どっちだ？

洋介 こっちです、案内します。

洋介は下手奥へと走る。

杉本は洋介の後を追いかけて、そして立ち止まる。

杉本は思索する。

洋介が立ち止まった杉本に気付く、

洋介 ……なにやってんですか、杉本さん、こっちですよ！

一瞬間の間。

杉本 ……洋介。

洋介 ？

杉本 ……もしも俺に……俺になにかあつたら……。

洋介 何かつてなんですか？

杉本は徐にポケットから紙切れを取り出し、洋介に差し出す。

杉本 ……ここに、この紙に書いてある住所に……あの観音様を届けてくれないか。

洋介 え？

更に杉本は別のポケットから財布を取り出し、

杉本 この金は旅費にしてくれ、大した額じゃないが、九州まで行って帰るくらいは楽にあるはずだ。

洋介 ……。

杉本は洋介に近づき、洋介の手を取り、財布とメモを握らせようとする。

杉本 頼むぞ。

洋介 頼むぞつて……何で杉本さんはあんなものを運んでるんですか？あの仏像は一体なんなのですか？

杉本 ……あれは俺の……。

洋介 ……。

ほんの少しの間。

杉本 ……（明るさを装い）あれは人様の大事な預かり物なんだ、万が一のことがあるといけないから……だからお前に頼むんだ。

洋介 ……。

杉本は洋介の手にメモと財布をしっかりと握らせ、

杉本 ……いいな、頼んだぞ。

洋介 ……。

杉本 行こう、観音様を取り戻さなきゃ、さあ、案内してくれ。

杉本は洋介を促す。

洋介 ……はい。

二人は下手奥へと退場していく。

一瞬の間。

上手奥から聞こえる十勝の声。

十勝 ……だからちよつと話だけでも聞いてくださいよ。

十勝を連行しながら矢崎、リュックを持った雁太郎、続いて絹代が登場。

矢崎 話は本部でゆっくり聞く、その仏像の件も含めてな。

十勝 仏像の事なんて知りませんよ、あれは本当に私のじゃないんですから〜！

矢崎は十勝の懇願を無視し、雁太郎と絹代の方を向き直り、

矢崎 申し訳ありませんが、奥様は隠退蔵物資の第一発見者として本部までご足労願えますか？

絹代 分かりました。

矢崎 先輩はリュックの方お願いします、私はこの杉本亮一を連行しますから。

雁太郎 分かった。

十勝 (雁太郎の台詞に被るように) だから私は杉本亮一じゃないんですって、信じてくださいよ、そんな名前じゃないんですから〜！。

雁太郎 じゃあどんな名前だ？

十勝 え？

雁太郎 杉本亮一じゃなければお前の名前は何だ？

十勝 ……と、十勝のり平と言います。

雁太郎 十勝のり平？

十勝 はい……(ふと思いつき) あ、そうだ。

十勝は縛られた手を胸ポケットに。

矢崎 何やってるんだ貴様！

連行紐を引っ張ろうとする矢崎。

それに抗い、十勝は胸ポケットから写真を取り出す。

十勝 ……(矢崎に写真を差し出し) ほら、この写真見てくださいよ！家の前で撮った家族写真なんです、ここに表札が出てるでしょ、十勝って、ね！

矢崎 (一瞥し) 小さすぎて見えん。

十勝 そんな事言わないで見てくださいよ……(雁太郎に写真を渡し) ね、書いてあるでしょ。

雁太郎 ……うくん、言われて見ればそう書いてあるようにも見えるな……(絹代に写真を見せ) どうだ？

絹代 ……そうですね、十勝って書いてあるようにも見えますね……。

十勝 そうでしょ、書いてあるでしょ、それが何より私が杉本亮一じゃないことの証しじゃないですか。

雁太郎 まあ確かに、人んちの前で家族写真撮る奴はいないからな。

十勝 そうですね、ほら、憲兵殿もよく見てくださいよ。

雁太郎は写真を矢崎に見せる。

十勝 お願いですから。

矢崎 ……。

洪々と矢崎は仏頂面でそれを眺める。

十勝 書いてあるでしょ……ね……ね。

矢崎 ……ふむ……。

十勝 私の住所は富士見町3-6-8です、小さな印刷屋をやってましたが、先だつての空襲で何もかも焼けちまったんで、田舎に疎開させている家族の所に身を寄せる途中なんです、嘘じゃありません、信じてください。

矢崎 ならばどういう理由で十勝という名のお前が、杉本亮一のリュックを持つてるんだ？

十勝 そ、それは……。

思案する十勝。

十勝 ……じ、実は……そのリュックは杉本亮一って人から預かったんですよ。

矢崎 預かった？

十勝 はい、干し芋やるからちよつとの間、見ててくれて。

矢崎 本当か？盗んだんじゃないのか？

十勝 滅相もないですよ、私は生まれてこのかた、人様の物に手を付けたことだけは一度だつてないんですから、大体、仏像なんか盗んだりしませんよ、ちつとも信心深くないんですから私と言う男は、ご先祖様だつてもう長いことほつたらかしますよ。

矢崎 ……。

訝しげに十勝を見る矢崎。

矢崎 今の一言で俺は貴様を見た目以上に嫌いになったよ。

十勝 へ？

矢崎は突然敬礼をし、

矢崎 以（もつ）テ爾（なんじ）祖先（そせん）ノ遺風（いふう）ヲ顯彰（けんしょう）スルニ足（た）ラン！

十勝 ……。

矢崎 教育勅語を読み直せ！祖先あつてこそ我々だ……（雁太郎夫婦に向き直り）さあ行きましょう先輩、こいつを念入りに絞り上げないと……。

十勝の顔には怯えの色。

十勝 か、勘弁してくださいよ！ご先祖を大切にしますから！

十勝を引きずるようにして一行は下手前方へと進む。

と、

杉本 待ってください！

振り返る人々。

一瞬の間。

上手奥から杉本、その後ろに洋介が居る。

矢崎 なんだ、貴様は？

一瞬の間。

杉本 ……リュックを……。

矢崎 リュック？

杉本 ……リュックを返してもらえませんか？

雁太郎 リュックってこれか？

杉本 はい……それは、私のリュックです。

矢崎 ……お前、杉本亮一か？

杉本 杉本亮一？

矢崎 それに書いてある名前だ。

杉本 あはっ……杉本亮一は私の兄です、私は弟の亮二です……兄は、三年前に他界したので、今は私がそれを使っています。

矢崎 ほう……ではこの仏像もお前の所持品か？

杉本 ……私の所有物と言う訳ではありませんが、とりあえずは私が預かっています。

矢崎 そうか……何ゆえお前はこの仏像を運んでいる？

杉本 ……。

矢崎 ……どうした？仏像を運ぶ理由を聞いているのだ。

杉本 ……。

杉本はその理由を語れずに矢崎を黙って見つめている。

矢崎 ……これは隠匿蔵物資だな。

杉本 隠匿蔵物資？

矢崎 貴様は一億玉碎のこの時に、お国のことも省みず、個人所有物を秘匿しようとしているのであろう！

杉本 ！

矢崎 ……この仏像は徴収だ、鉄で出来ているからな。

杉本 ……ま、待ってください！…それは隠匿蔵物資などではありません。

矢崎 では何だ！という理由でお前は仏像を運んでいるのだ！

杉本 ……それは…。

間。

杉本 ……疎開です。

矢崎 疎開だと？お前はこの仏像を疎開させていると言うのか！

杉本 はい。

矢崎 この仏像は国宝か？

杉本 いえ違います…その観音像は、知り合いの、小さな寺の……本尊です、空襲による被害を避けるため、私が、疎開させているところです。

矢崎 ふん、呑気な奴だ……本土決戦が近いというのに、仏像を疎開させているだと？貴様、恥を知れ！わが国の存亡は今この時にあるんだ！お国のためにすすんで供出してこそその大日本帝国臣民ではないのか！

杉本 ……。

矢崎 お前も付いて来い、その腐った性根を叩きなおしてやる。

下手前方へと歩き始める矢崎。

杉本は動かない。

杉本 ……返してください。

矢崎 ？

立ち止まる矢崎。

杉本 ……リュックを返してください。

矢崎 ……駄目だ。

つかつかと杉本は歩み寄る。

杉本 お願いします！リュックを返してください！

矢崎 駄目だ！

杉本 お願いします！それは私にとって大事な…。

バチン！

矢崎の平手が飛ぶ。

倒れる杉本。

一同 ！

洋介 杉本さん！

雁太郎 ……（洋介の台詞に被るように）おい矢崎。

この時、雁太郎が肩に掛けていたリュックを下ろすといいいのだが。
ほんの少しの間。

矢崎 ……立て、立って、ついて来い……この非国民が……。

杉本 ……。

杉本はゆっくりと立ち上がりかける。

矢崎はそれを確認し、

矢崎 さあ行きましょう、先輩。

雁太郎 あ……ああ。

杉本 ……リュックを返してください。

矢崎 ？

杉本 リュックを返してください！

杉本は雁太郎にぶつかり、そのリュックを奪う。

雁太郎 あ！何を。

矢崎 貴様……！

矢崎が駆け寄る。

十勝の連行紐はここでフリーになる。

杉本はリュックを抱きしめようとする。

矢崎 何をやっとするか！……むん！

杉本 ぐわ！

矢崎の拳が飛ぶ。

殴られた杉本が床に倒れこむ。

しかし、すぐさま起き上がり、再び仏像のそばへ走り、抱きしめる。

矢崎 貴様！むん。

杉本 ぐわ！

再び、飛ぶ矢崎の拳。

倒れこむ杉本。

再び杉本は仏像に駆け寄り、抱きしめる。

杉本はリュックに回した自分の両手を固く絡み合わせる。

杉本 ……。

矢崎 おのれ！……その手を放せ……放さんか！むん！

矢崎の拳が飛ぶ。

だがガツチリとかみ合った杉本の両手は放れない。

矢崎 放せと言ってるのが聞こえんのか！……放せ！むん！……むん！……むん！

一度、二度と矢崎が杉本を殴りつける。

しかし、杉本は観音像を抱きしめ、じっと耐える。

暴力の音だけがあたりに響き渡る。

矢崎 ……はあ……はあ。

殴りつかれた矢崎が息をつく。

矢崎 ……何故だ……何故、その手を放さんのだ！

杉本 ……俺がこの手を放したら……あんたたちはこの観音様を溶かして、武器に変えてしまっ……俺はそんなことをさせたくないからだ。

矢崎 ……そうか……なかなか見上げた信仰心だ、だがな、米国の本土上陸が近いんだ、大日本帝国の興亡はを左右するのは一発の弾薬だ、敵兵を倒す鉄の爆弾だ……半可な信仰心はしばし我慢しろ。

杉本 ……違っ……違っんですよ、憲兵殿。

矢崎 ？

杉本 ……俺がこの手を放さないのは……そんな理由じゃないんです。

杉本はゆつくりと矢崎の方に目をやる。

杉本 ……俺は、これが仏像だから守りたいんじゃない……兵器の顔をしてないから、爆弾の形をしてないから守りたいんだ！

矢崎 ……どういことだ？

杉本 この仏像のどこをどうみたら人殺しの道具に見えるんですか？……これはそんな形をしていないじゃないですか！誰かを殺すようには出来ていないじゃないですか！

矢崎 ……。

ほんの少しの間。

杉本はリュックの名前に目をやる。

杉本 ……このリュックの持ち主は……三年前に戦死した俺の兄、杉本亮一は、とても心の優しい兄でした、草や花が好きで、いつも植物図鑑を持ち歩くような……本当に優しい兄でした……そんな兄に赤紙が来て、兵役に就くことになり、戦地へ赴く前の夜、俺は星を見ながら兄と話をしました……「兄貴さあ、そんな細かい女みたいな手で本当に敵と戦えるのか？」俺がそう聞くと、兄は笑って「まあ無理だろうな、俺はそんなふうには出来てないもの、敵とまともにやりあおうと思ったり、一回死んでもう一度生まれ直さないとな。」って……それから一年して兄は戦死しました、ガダルカナル島です……しばらくして戻ってきた兄の遺品の中に俺は一本のナイフを見つけました、そのナイフは兄が植物採取用にといつも持っていた古びた、錆びの浮いた小型ナイフです……久方ぶりに見たそのナイフはきれいに砥いであり、触っただけで切れそうなほどでした……兄が、あの植物が好きだった兄が、どんなことを思いながらナイフを砥いでいたのか……俺は兄が誰かを殺したかどうかは知らない、勇敢な戦いだったとしか聞いていない……。

杉本はゆつくりと矢崎の方に目をやる。

杉本 ……憲兵殿にお尋ねします…。俺の兄は、誰よりも優しくったあの兄貴は、いつ…どこ…誰かを傷つけるためにナイフを砥ぐような、そんな男に変えられてしまったんですか？

ほんの少しの間。

矢崎 ふん、くだらん感傷だ、国が生きるか死ぬかの瀬戸際で戦っているんだ、一億の心を兵器へと変えねば勝利はありえない！それが戦争だ！

杉本 ……分かっていますよ、それくらい俺だってわかってますよ、それが戦争だって…けれど、俺は…もう誰も、もう何も…変えさせたくはないんです！あるべき姿を溶かしたくはないんです…この観音像は絶対に供出させたりはしません…俺が、命に代えても守り抜きます。

洋介 ……杉本さん。

矢崎 ……よし、ならば守り抜いてみる

矢崎 ……よし、ならば守り抜いてみる…。

矢崎は軍刀を抜く。

雁太郎 矢崎！

矢崎 皇大御国（すめらみくに）の為、鉄観音供出、御願ひ奉る…。いや…！

軍刀を振りかぶり、矢崎は杉本へと近づく。

杉本 ……。

矢崎は振りかぶった杉本の側へ。

矢崎 ……覚悟はいいな。

杉本はゆつくりと目を閉じる。

矢崎 ……いやあ…！…。

矢崎の音が響く。

だが軍刀は下ろされない。

矢崎 ……いやあ…！…くそ…でやあ…！

軍刀を構えた矢崎の手が震え、矢崎の音が響き渡る。

しかし決して矢崎の太刀は下ろされない。

ゆつくりと雁太郎が矢崎に近づき、矢崎の震えを止める。

雁太郎 ……もういいんだ矢崎、その手を下ろせ…お前だって誰かを斬れるようには生まれていないだろ。

矢崎 ……先輩。

雁太郎 ……（杉本に）さあ、行けよ…これは鉄の観音像じゃない、誰も供出しろなんて言わないさ。

矢崎 先輩！

杉本 ……。

雁太郎 さあ早く行きな、もう大丈夫だから。

立ち上がりかける杉本。

矢崎が軍刀でその行く手を阻む。

矢崎 駄目だ、このまま行くことはまかりならん！

雁太郎が矢崎の肩を掴む。

雁太郎 ……もういいじゃないか矢崎……見逃してやれよ。

矢崎 しかし！今はお国の大事の時です！

雁太郎 いいんだよ矢崎、大事の時だから、こんな勇がいてもいいんだよ。

矢崎 ？

雁太郎 みんながみんなお前みたいなことを考えてたら、本当に玉砕しか手はないんだぞ……一億の民と……この国は滅びるしかないんだぞ……お前は、この国をヒロシマのような焦土にしてもいいのか？お前は本当にそれでいいと思っているのか？

矢崎 ……。

ほんの少しの間。

雁太郎 ……（杉本に）さあ、行きな、しっかり守ってやってくれよ、その……お観音様を。

杉本 ……。

杉本は深く一礼し、上手前方へ歩き始める。

洋介 ……杉本さん。

洋介が杉本の後を追って下手前方へ。

雁太郎が矢崎の肩を優しく叩く。

ゆつくりとゆつくりと明かりが落ちていく。

暗転。

舞台に明かりが入る。

柔らかな朝の陽射し、心地よい風が南町駅のホームを渡って行く。

舞台上で杉本がいつ来るかも分からない汽車を待っている。

少し放れた舞台上手では洋介がそんな杉本を見守っている。

下手に見える南町駅の案内板。

ほんの少しの間。

洋介はポケットから財布とメモを取り出し、

洋介 ……あの杉本さん……。

杉本 ……。

杉本はただただ遠くを見つめている。
仕方なく洋介はじっと待つ。

舞台下手奥（つまりホームの向こう側）から子どもたちの声。
杉本と洋介は何気に子どもたちのやり取りを見つめる。

平次 和歌ちゃん、こつちこつち〜！

和歌 待つてよ〜！平ちゃん。

襷がけをし、棒切れを持った平次と和歌が登場。

杉本と洋介は何気に子どもたちのやり取りを見つめる。

平次 覚悟はいいね、和歌ちゃん。

和歌 うん、出来てるよ、平ちゃん。

平次 これから僕たちは島本四兄弟の末っ子、学（五歳）を泣かしに行くよ。

和歌 うん、島本四兄弟の長男と次男と三男への恨みを末っ子の学（五歳）で晴らすんだね。

平次 そうだ、江戸の敵を長崎で討つようなものさ。

和歌 うん、だけど平ちゃん。

平次 なんだいい和歌ちゃん？

和歌 私たちに末っ子の学を本当に泣かすことが出来るかな？負けたりしないかな？

平次 大丈夫さ、だって僕はこの戦いを有利に進めるために一つ作戦を考えたんだ。

和歌 作戦？どんな作戦なの？

平次 落とし穴作戦さ。

和歌 落とし穴！

平次 そうさ、まずそこに島本四兄弟の末っ子、学を落っことして、上から石を投げたり、この棒で突っついたりするんだ、これなら絶対に負けっこないぞ。

和歌 なるほど、卑怯だね、平ちゃん。

平次 作戦とは常に卑怯なものさ、ココ（頭）を使ったものが勝つのさ、ニヤリ。

和歌 ココを使わなきゃね、イヒヒヒ。

平次 イヒヒヒヒ。

二人はいやらしく笑いあい、

平次 じゃあ島本四兄弟の末っ子を陥落させに行こうか？和歌ちゃん、二等兵。

和歌 分かりました、平ちゃん隊長殿。

平次 いざ出陣！

和歌 出陣！

二人は上手へと消えていく。
思いつめた顔をしていた杉本はそんな子どもものやり取りにつき苦笑する。
洋介がホツとしたように笑う。

洋介 ……やっと笑いましたね。

杉本 え？

洋介 昨日からずっと怖い顔したまんまだったから……あんな事あったから無理もないけど。

杉本 そうか……考え事してたからな……。

洋介は頷く。

杉本 ……汽車遅いな。

杉本ははるか遠くに目をやる。

洋介は一瞬思索し、財布とメモに目をやり、そして杉本に近づく。

洋介 ……(財布とメモを差し出しながら) 僕、ここで。

杉本 ？

洋介 ……ここで分かります、行きたいところもあるし……。

どことなく気恥ずかしげな洋介。

一瞬の間。

杉本 ……(にっこり微笑み) 分かったよ。

洋介 ……何処に行くか聞かないんですか？

杉本 聞かなくてもその顔見れば分かるよ、青い帽子の彼女の所だろ。

洋介 ……(満面の笑みで) はい……でも途中で許してくれるかどうか分からないですけど。

杉本 許してくれるよ、あんな旨いおにぎり作ってくれる人なんだから。

洋介 ……だといいけど。

杉本 幸せにな。

洋介 ……努力します。

頷く杉本。

洋介 ……杉本さんも道中気をつけて。

杉本 ああ。

ほんの少しの間。

洋介 ……それじゃあ。

洋介は上手に向かい、立ち止まり、そして、

洋介 有難うございました！

杉本 こっちのほうこそ、有難う。

二人は一瞬見つめあう。

洋介は会釈をし、そして去っていく。

杉本はホツとしたように息をつき、大きく伸びをする。

杉本 ……しかし遅いなあ……。

なかなか来ない汽車に目をやる杉本。

と、舞台上手から雁太郎の声。

雁太郎 お〜い！

杉本 ？

上手から息を切らせて雁太郎が登場。

雁太郎 ……はあはあ。

雁太郎は息が整わず喘いでいる。

杉本 あ、あなたは昨日の……昨日はどうもありがとうございました。

杉本は深々と頭を下げる。

雁太郎が息をつきながら、手を振る。

雁太郎 ……はあはあ、いや、礼には及ばないよ……はあはあ、あ〜しんどい……うちのがさ……あんたがここに居るのを見かけたって言うもんだから急いで飛んできたんだ……はあはあ……教えてやるろうと思つて。

杉本 何をですか？

雁太郎 ……いくら待つても今日は汽車は来ないぞ。

杉本 え？

雁太郎 昨日、この路線の先は空襲でやられちゃったんだよ、だから今日は運休だ。

杉本 そうですか……そう言えば、昨夜は空襲警報が鳴ってましたものね……仕方ない、歩くか。

杉本はリュックを背負う。

雁太郎 あ、ちょっと待つてくれよ、今うちのがさ、芋蒸かしてるんだよ、あんたに食べてもらおうと思つて。

杉本 えっ何で又私にそんなことを？

雁太郎 まあ貰つてくれよ、食べるのはあんたでもうちのにしてみれば、そのお観音様に供えたいんですよ、四国のお遍路さんみたいに。

杉本 ……(苦笑) お遍路さんですか……。

一瞬の間。

雁太郎 ……一緒になってもう五年になるんだけどな、子どもがまだなんだよ……なかなか出来なくて……まあ俺はこんな時代だから出来ていいものやらって思ってたんだけど、あいつは子ども欲しいもんだから、願掛けばかりしてるんだ……。

杉本 そうですか。

雁太郎 ……俺な、歴史の教師やってるんだ……教え子が戦地に行くのも随分と見送ってきたよ……辛いもんだよな、見送るのって……真っ直ぐな瞳で「お国のために頑張ってます。」とか言われると、無性に辛くなって「お前が戦地に行くと俺はセンチになっちゃうんだ！」って……。

杉本 ……そんな事言うんですか？

雁太郎 言いたいけど黙ってる……それを言うとアカだと思われるからな、馬鹿だと思われてもいいけど、アカだと思われて憲兵に睨まれたりしたら、色々大変になるからな。

杉本 ……。

雁太郎 ……歴史やってつくづく思うよ……笑いのない時代ってのは……駄目な時代だよ……。

杉本 ……そうかも知れませんね。

雁太郎 ……俺は駄洒落のはびこる時代がいいな。

杉本 ……(それはどうだろう?)

一瞬の間。

上手から絹代の声。

絹代 あなた〜！

雁太郎 ……(手を振り) お〜!こころうさん。

上手から息を切らし、芋を持った絹代が登場。

絹代 ……はあはあ……こんにちは。

杉本 こんにちは。

絹代 ……(芋を杉本に差し出し) これを食べてもらおうと思って。

杉本 ……すみません、わざわざ。

絹代 急いで蒸かしたものだから、おいしく出来てるか心配なんですけど。

雁太郎 なあに、モノが芋だけにきんとん(きつと)旨いさ。

絹代 まあ、ウフフフ。

雁太郎 遠慮なく食べてくれよ、酸いも甘いも噛み分けてな。

絹代 まあ、あなたったら連発、ウフフフ。

杉本 ……。

杉本はちよつと頭を抱える。
ほんの少しの間。

雁太郎 じゃあ俺たちはそろそろ行こうか。

絹代 はい……あの杉本さん。

杉本 はい。

絹代は杉本に近づく。

絹代 ……お観音様共々、どうかご無事で……無事に疎開できますよう祈っております。

杉本 有難うございます。

雁太郎 それじゃあ。

絹代 失礼致します。

二人は上手に向かいかける。

杉本 あ、奥さん。

絹代 ……？

杉本 ……この観音様のご利益は安産らしいんです……いつか子どもが出来たときに、効果があるかもしれないですから、よかったら拝んでいってください。

絹代 あ、有難うございます。

絹代はリユックの中の観音様に祈る。
祈りを終えた絹代はにっこりと杉本に微笑みかけ、

絹代 ……それでは失礼致します。

雁太郎 気をつけてな。

杉本 ……お二人も。

そして去っていく雁太郎と絹代。
ほんの少しの間。

杉本 ……さあ行くか。

上手に向かいかける杉本。

十勝 ……よう。

杉本 ……？

駅案内板の向こうに十勝が顔を出す。

杉本 あ、てめえ……。

つかつかと杉本が歩み寄りうとする。

十勝はいきなり土下座する。

十勝 すまん、この通りだ！本当に悪かったと思ってる、勘弁してくれ

ほんの少しの間。

杉本 ……ち、殴ったって仕方ねえか……。

杉本は無然としながら上手へ向かおうとする。

十勝 あ、待ってくれよ。

杉本は無視して進もうとする。

十勝 九州まで行くんだろ、その仏像を疎開させるために。

杉本は立ち止まる。

杉本 何でそれを知ってるんだよ？

十勝 昨日あんたといいた若いのに教えてもらったんだよ、頼み込んで。

杉本 ちっ……。

十勝 ちようどよかったよ、九州で、俺も一緒に行くよ。

杉本 ああん？何言ってるんだ？

十勝 ほら前に言っただろ、うちの女房たちの疎開先、佐賀なんだよ、だから途中まで一緒に行くよ。

杉本 何を馬鹿な事言ってるんだよ？泥棒と一緒に旅する奴がどこに居るんだよ？危なっかしくてしょうがねえよ。

十勝 すまん、本当に悪いと思ってる、だからさあんたが疲れた時は、俺が代わりにリュック背負うからさ、な、いいだろ、少しは罪滅ぼしをさせてくれよ。

杉本 そんなこと言って、又盗って逃げるんだろ。

十勝 しねえよ、もう金輪際しねえよ……実を言うと罰が当たりっぱなしなんだよ、その仏像を粗末に扱ってから……このまんま家に帰ったら、俺きつと、女房と娘と女房の母親にボコボコにされちまうんだ、嘘じゃねえよ、半端じゃなく強いんだ、あいつら……女房の家系は女相撲の家系なんだよ。

杉本 どんな家系だよ。

十勝 本当だよ、盛んなんだよ、女相撲が、うちの田舎は……うちの女連中が連れ立って歩くと牛や馬でさえ避けるんだよ、投げられたくないから、それくらい凄いんだよ、だから頼むよ罪滅ぼしさせてくれよ、な、あんただって一人より二人の方が心強いだろ。

杉本 泥棒と一緒に居たって心強くなかならねえよ。

杉本は上手に向かう。

十勝 あ、おい待ってくれよ〜！

下手からフーが登場。

フー こうして男とスイカ泥棒は南町駅を後にした……やがて、南町駅はドンドン遠ざかっていき、そして……見えなくなった。

杉本と十勝は上手に退場。

一瞬の間。

フーは前方へと歩き始める。

幾人かのコロスが舞台を横切り始める。

フー ……夏の涼風が時折町を通り過ぎて行った……男とスイカ泥棒は瀬戸内海を臨む海沿いの道を西へ西へと下っていった、点在する島々の間で波がキラキラと揺れていた、行き交う人は相変わらず疲れきっていたが、風は心地よかった。

舞台上手億から杉本と十勝が現れる。

フー ……スイカ泥棒は男が疲れた顔を見せると、約束どおりリュックの係りを交代することを申し出た、この辺りは実に殊勝だった……。

舞台上ではリュックを持つことを申し出た十勝に杉本がリュックを渡している。

杉本はタオルを差し出し、

杉本 ほら、少し汗拭けよ。

十勝 いいって、いいって。

フー 拭けって言ってんだろ〜！

十勝 俺は体の七十パーセントが汗だから。

フー どんな体だよ……。

十勝はリュックを背負い、

十勝 よいしょ、さあ行こうぜ。

一瞬止まる杉本とスイカ泥棒。

フー 潮の香りが汗の香りへと変わった……観音様はかなり息苦しかったが、そのことを除けば、その日の旅は穏やかに進んでいった……。

ゆっくりと動き始める二人。

フー ……翌日、風が痛ましい出来事を伝えた……。

コロス1 ……ナガサキに又ピカドンが落ちたそうさ。

コロス2 原爆って言うそうさ。

コロス3 ……原爆……。

フー、杉本、十勝はゆっくりと天を見上げる。

ドゥンと言う低く、重い音が舞台に響く。
一人のコロスがへたり込む。
一人のコロスがよろめき、別のクロスにしがみつく。
天を見上げる者、がつくりと肩を落とす者もいる。
そうして時間が止まる。
長い間。

フー ……それでも二人は歩き続け……。

動き始め、やがて人々は退場していく。

フー 瀬戸内の海を見ながら、潮騒の音を聞きながら、焦土の町を幾つも越え、やがて九州へと入っていった。

十勝は立ち止まる。

杉本 ……なんだ疲れたか？

リュックを下ろし、杉本に渡しながら、

十勝 ……俺、ここで別れるよ……こっち（上手）行くから。

杉本 ああ、そうか、佐賀だって言ってたもんな。

十勝 あんたは南へ下るんだろ。

杉本 ああ……。

十勝 折角なら最後まで行きたいところなんだけど……そういうわけにもいかないから。

杉本 家族が待ってるもんな。

十勝 拳構えてな、ははは。

十勝の笑いには力がない。

十勝 ……あんたも嫁もらう時は女相撲の家系だけはやめとけよ。

杉本 そんな家系、探すほうが難しいよ。

十勝 そうだよな……普通はそうだよな……何で俺は……じゃあな……はあ……。

十勝は力ない足取りで上手に向かう。

杉本 ……待てよ。

十勝 ？

杉本 この観音様、戦勝観音って言うんだ。

十勝 戦勝観音？

杉本 戦いに勝つって、利益がある。

十勝
！

杉本
これに祈願して……嫁を寄りきれ。

十勝
ああ！

十勝は祈る。
一瞬間の間。

十勝
……なんか力が湧いたような気がするよ。

杉本
そうか。

十勝
じゃあ、元気でな！

手を振りながら去っていく十勝。

杉本
ああ……つい嘘のご利益教えてしまったけど、まあいいか。

杉本は歩き始める。

フー
……スイカ泥棒と別れ、男は又最初のように、たった一人で歩き始めた……男は進路を海沿いの道から山道へと変えていった、町には米国が上陸してくるとの噂が流れ、憲兵や軍人の数も気のせいが増えているような気がしていたからだ……。

明かりは杉本とフーのサス明かりだけが変わっている。

フー
……男は黙々と……本当にただ黙々と、険しい山道を歩いていった、誰にも出会わず、目の前にある道に向かって、ひたすらに進む穏やかな時間であった……時折、爆音が聞こえ、空の彼方に銀色の光が見えた。

杉本は足を止め、空を見上げる。

フー
……あれはB29、戦争の悪魔のしもべたち……どこかの町を壊しに行くのだと思うと男の心は痛んだ……だから男は山の上から眼下に広がる景色に目をやり、そこに巡る四季に思いを馳せた。

杉本はゆっくと眼下に広がる風景を見渡す。

杉本
……夏のこの景色も、秋になれば紅葉が色づき、赤く染まっていく……冬になれば雪が舞い、綿帽子を被ったような銀色の世界へと変わり、そして又春が来て、サクラが咲くんだ……そうだろう……そうなんだろ？

フー
男は初めて訪れたその場所の、そして二度とはやっつけないだろうその場所の季節を思い、それから又、歩き始めた……。

再びゆっくと歩き始める杉本。

フー
……(亮一になり) おい、足元気をつけろよ、そこにカッコウアザミが咲いてるぞ……亮一、ほらソコ、それギンリョウソウって言うんだ、変わった形してるだろう……。

杉本
……そうだな。

フー
……亮一、これきつとカタクリの花だよ、来年の春にはこれが花を咲かすかも知れない、なかなか見れないんだぞ、発芽から花を咲かすまで七年かかるって言われてるんだから。

杉本
へえ。

フー 亮「こつちにはキリンソウがあるぞ、綺麗だろ、なあ……亮……亮……亮……」

兄の声が遠ざかっていき、

……そして兄と交わした時間が過ぎていく。

やがて杉本は立ち止まる。

ほんの少しの間。

杉本はポケットからメモを取り出し、確認する。

その顔がほころぶ。

杉本 ……ここだ。

ゆつくりと振り返る杉本。

合わせて明るくなる舞台。

舞台奥にはお堂が一つ。

杉本 ごめんください……ごめんください。

湯布院坊が上手から現れる。

湯布院坊 はい？

杉本 こんにちは、花東山寺の竺念さんから言われて、こちらに、このお観音様を疎開に。

湯布院坊は驚いたように杉本をまじまじと見つめる。

杉本 竺念さんから話は？

湯布院坊 ああ、聞いておる、もちろん、聞いておるよ……。

杉本 ……(リュックを下ろしながら)色々あったもので到着が遅れてしまった、すいません。

湯布院坊 いやあ無事でよかった……無事でよかったが……しかし……。

杉本 ？

湯布院坊 ……戦争はもう終わったんだ。

杉本 え？

湯布院坊 ……さつき玉音放送があった。

杉本 玉音放送？

湯布院坊 ……ラジオでな、天皇陛下がそう仰られた、ニッポンは敗戦を受け入れたと……。

ほんの少しの間。

杉本 ……そうですか……戦争は終わったんですか……。

よろめく杉本。

湯布院坊 あ、大丈夫かい？

湯布院坊は杉本を支える。

杉本 大丈夫です……ちょっと力が抜けたものですから……。

湯布院坊 ちょっと待ってなさい、今、水か何か持ってくるから。

湯布院坊は上手に退場。

杉本はゆつくりと腰を下ろしながら、

杉本 ……そうか……戦争、終わったのか……。

フー ……あ。

フーは空に目をやる。

フー ……戦争の悪魔が、消えていく……。

杉本はリュックの入った観音様に目をやり、

杉本 ……兄貴……終わったってさ……戦争は終わったってさ。

杉本の目から一筋の涙がこぼれる。

杉本はゆつくりと観音様に額をつける。

ゆつくりと明かりが落ちていく。

そして大扉が閉じられていく。

明かりはフーのサス明かりだけになっている。

フー ……それから数年、戦後の混乱期がおさまり、人々の生活にも平安が訪れ始めた頃、戦勝観音は一拍一日の旅をし、再び元の寺へと戻っていき……。

キンキンと言うテレビゲームの電子音が舞台に響き、

純一郎 ダッセエ……ダッセエ、もう死んでやんの……ダッセ、超ムカつく。

舞台に明かりが入る。

閉じられたお堂と閉じられた大扉。

オープニングの光景に戻っている。

舞台前ではゲームボーイアドバンスに興じる純一郎。

その横には漫画を読むブッシュユ子。

純一郎 あくあ、又リセットかよ。

純一郎がリセットボタンを押そうとしたその時、

フー 坊や。

純一郎 ？

フー ……偉くなっても、戦争なんかしちや駄目だぞ。

純一郎 何か言った？

ブッシュユ子 言わないよ。

純一郎は一瞬辺りを見渡し、徐にブツシユ子の手を掴み、

純一郎 「こゝ何かいるよ！ お化けだよ！

ブツシユ子 え？

純一郎 何かいるよ〜！

純一郎はブツシユ子を引つ張りながら下手へと逃げていく。

ブツシユ子 痛いよ〜！何で引つ張るのよ〜！

ほんの少しの間。

フー ……（お堂に目をやり）戦勝観音は以前のように、こゝ本尊として静かな時を過こしている……平成十六年、四月十六日……（付けてはいない腕時計を確認し）午後八時四十五分（？）その静かな時間と、この国の平和は……まだ続いている……。

フーは、ゆっくりと踊り始める。

……危うく、脆いこの国のの平和をいとおしむように。

フーはお堂に向けてサインを送る。

ゆっくりとお堂が開き始める。

フーはお堂の中へ。

ギー……ガッシャーン。

お堂が閉じられる。

音楽が消える。

明かりが落ちていく。

終わり。

この舞台が幸福であるように、
そしてなによりこの世界が平和であるようにとの祈りを込めて。